

第8回考古天文学会議（2024年8月17日）

「アイヌ民族と日蝕」

天文民俗班 今野 利秋（アジアの星物語プロジェクト）

1. はじめにーアイヌ民族の星の文化と末岡外美夫氏

末岡外美夫氏は現在、“アイヌの星”を語る時に欠くことのできない業績を残した人物である。確認できている末岡氏の著作物は発表年代順に以下のとおりである。

- ①「アイヌ人と星」（『旭川天文研究会 天文図報3号』）、1951年
- ②「惑星の旧愛乃名」（『THE SKY 7号』）、1954年
- ③『北方の神話と星』A・オルト、佐藤昭一（共著）、1955年
- ④「日食に因むアイヌの伝説」（『北海タイムス』）、1958年
- ⑤「アイヌ民話と星」（『日本大学第二高等学校研究 集録4』）、1962年
- ⑥『アイヌの星』旭川振興公社、1979年
- ⑦「北の星」（『北海道新聞』上川版）、1982年9月～1983年7月
※「秋」「冬」「春」「夏」編をそれぞれ20回、計80回連載
- ⑧『人間達（アイヌタリ）のみた星座と伝承』末岡由喜江、2009年

アイヌ民族の星の文化が紹介される際、『アイヌの星』や『人間達（アイヌタリ）のみた星座と伝承』（以降『アイヌタリ』）に記載されている事例から参考・引用されることがほとんどである。しかし、それらはアイヌ民族の星の文化をすべて収録しているものではなく、収録にあたって末岡氏独自の判断基準というフィルターによってふるいにかけている。また、末岡氏に続くアイヌ民族の星の文化について調査研究をする専門家が、現状では不在である。最後の著書『アイヌタリ』が出版されたのは2009年ではあるが脱稿は1980年である。これ以降、アイヌ民族の星の文化の収集が系統立てて行われておらず、各種調査に含まれている事例も埋もれているのが現状である。

そこで天文民俗班では、1980年以降の調査や報告等に散在している事例をできるだけ発掘すること。それらから得られた事例と末岡氏の著書の事例を一覧化したデータベースを作成すること。それをマッピング化することを今期（2023～2026年）の到達点に設定した。この方針のもと、歴史的文献、研究書、各種調査報告書、辞書などからアイヌ民族の星の文化に関する事例（語彙、諺、伝承、聞き取り、神話や民話等）を、幅広く収集している段階である。今回は、その中から、2030年の北海道内で見られる金環日食も視野に入れて、日蝕に関する事例を紹介することとした。以下、資料集的に一部を掲載する。

2. 末岡氏の著作におけるアイヌ民族の日蝕

『アイヌの星』と『アイヌタリ』では、以下のように太陽や月に関して独立した項目が建てられている。

- ・『アイヌの星』：第11章 チュプとクンネチュプ
- ・『アイヌタリ』：第2章 太陽、第3章 月、第4章 日月食

本報告会では主に『アイヌタリ』に掲載の事例から一部を紹介する。なお、末尾にあるアルファベットは、末岡氏が広大な北海道における各地のアイヌ民族の文化の違い等を考慮して設定したエリア分けである。現在の総合振興局・振興局とほぼ近いので、それに沿うと以下のようなになる。

H：道内のかなり広い範囲

I：後志、渡島、檜山、胆振（西半分）

II：石狩、胆振（東半分）、日高（西側2/3程度）

III：胆振、日高（東側1/3程度）、十勝、釧路、根室、オホーツク（中部東部）

IV：空知、上川、オホーツク（中部西部）、十勝（北半分）、釧路

V：留萌、宗谷、上川（北部）、オホーツク（北西部）

1) 日蝕を表す言葉

- ・チュプ・ライ (cup・ray 太陽が・死ぬ=日食) [III・IV・V]
- ・チュプ・サンペ・ウエン(cup・sanpe・wen 太陽・の心臓・が病む)[H]
- ・トカプ・チュプ・ライ(tokap・cup・ray 日中の・天体[太陽]・が死ぬ)[I・II]
- ・トカム・シリクンネ (tokam・sirkunne < tokap・sirkunne
日[太陽]・が暗くなる)[IV]
- ・チュパンコイキ(cupankoyki > cup ankoyki 太陽をわれわれが叱る=日食) [H]
- ・チュプ・チルキ (cup・ciruki 太陽・が吞まれた) [IV・V]
- ・チュプ・カシ・クルカム (cup・kasi・kurkam > cup・kasi・kur・kam
太陽・の上を・魔者・がかぶさる) [I・IV]

※『アイヌタリ』 p66,67

2) 日蝕の際のふるまい

①『蝦夷草紙』最上徳内、1790年

「松前町人阿部屋伝吉請負場所ミツイシといふ小處に着。伝吉支配人予に問ふ。

當年の元旦書、俄に天搔き曇り、闇の如くになりて、蝦夷人ども大きに騒ぎペウタケとし鯨鐘をあげ、甚だ嘆息す」

(中略)

文中「ペウタケとて鯨鐘をあげて」とあるのは、悪魔払いや危急の際に、かん高い声で叫

ぶことで、このような叫びをペウタンケ (pewtanke) という。ペウタンケは本来女性が異変の際に大声で叫ぶことであるが、急を要する場合は、男性も女性のような細く高い声で叫ぶ。こうすると、カムイが早く振り向いて救ってくれると信じられていた。

※1786 (天明6) 年1月30日の日蝕のこと。旧暦では正月だった。

※『アイヌタリ』 p67,68

②[I・II]の地方

臼や桶を外に持ち出して

フホー ホーイ

ホーイ ホーイ

と叫びながら、太陽の姿が回復するまで打ち鳴らしている。

チュプカムイ 太陽のカムイよ

タスム 病気が

ペムパン 早く

リテン・クス・ネ・ナ 治りますように

と祈る。

1936(昭和11)年6月19日利尻から斜里へ抜けた皆既日食は、白老の浜に点在していたコタンの上に、暗い影を落した。当時の白老の宮本エカシマトク首長夫妻は、正装して屋根にのぼって太陽の回復を祈念した。エカシマトク首長がイナウを捧げてチュプカムイの回復を祈る間、傍に水を入れた器を置いた夫人は、正座したまま柳の枝で天に水を振り掛けていたと伝えられている。 ※『アイヌタリ』 p68,69

③[III]の東部海岸地方

器に清水を汲んできて、その水をイナウや笹の葉で天に向かって振り掛け、心の中でチュプカムイの回復を祈る。別に声を出したり、呪文をとることはなかった。

※『アイヌタリ』 p69

④[III・IV]の山地

手近にある桶や器を木切れで力まかせに叩いて、つぎのように叫ぶ。

チュプカムイ お日さま

ホーイ ホーイ

エライ ナー あんたは死ぬよー

ホーイ ホーイ

ヤイヌパ 息をふきかえせ

ホーイ ホーイ

※『アイヌタリ』 p69

⑤[Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ]の地方

男たちは欠けて行く太陽をめがけてノイヤ (noiya 蓬) で作った矢を射掛け、女たちは身近にある器物を打ち鳴し声を合わせて、

チュプカムイ	太陽のカムイよ
エ・ライ ナー	あなたは重態だ
ヤイヌー パー	甦れよー
ホーイ オーイ	ホーイ オーイ

と叫ぶ。

蓬の矢は太陽を呑み込む魔者だけでなく、すべての魔性のカムイを倒すのに極めて有効な手段であった。 ※『アイヌタリ』 p70

⑥[V]の地方

身近な物を叩いて駆け回り、つぎのような文句を声高に叫ぶ。

チュプカムイ	チュプカムイよ。
エアト°	吐き出せ
エアト°	吐き出せ
ホーイ オーイ	ホーイ オーイ

久しい間、アイヌモシリの日食は、太陽が魔者に呑み込まれるために起る現象と信じられていた。太陽を呑み込む魔者は、オキナ (okina > ok・ina 鯨の化物)あるいはシト°ンペ (situnpe > situ・un・pe 山奥・にいる・もの=黒狐) とよばれるものであるが、その正体はあまり明確ではない。オキナあるいはシオキナ (siokina > si・okina 大きな・化物鯨)とよばれる化物鯨は想像を絶した大きさで、上顎は天空にまで届き、空に浮かんでいる太陽をひと呑みにしたと言う。一方シト°ンペ、あるいはクンネスマリ (kunesumari > kunne・sumari 黒い・狐)とよばれる架空の黒狐は、アイヌモシリの中北部ではチュプカムイを襲って日食を引き起こす程の悪魔的野性と信じられていたが、南部ではコタンを守護する重いカムイとして、崇拜の対象となっていた。 ※『アイヌタリ』 p70,71

3. その他の事例

1) 知里真志保

「アイヌに伝承される歌謡詩曲に関する調査研究」『文化財委託研究報告Ⅱ』、文部省文化財保護委員会、1960年

※末岡氏も事例紹介として著書に引用

III 日食の際の呪法と呪文

4. 日食に対するアイヌの考え方

アイヌは日食を魔神が日の神を呑むために起るものと考えていた。北海道の中東北部から樺太へかけては、この魔神を妖狐と考え、日食のことを「チュプ・チルキ」(chup-chiruki)「日が・呑まれた」と称する。

5. 樺太の例

樺太の白浦では日食の際は狐の毛皮で作った帽子を冠り、太鼓でもお盆でも何でもかまわぬから円い物を戸外に持出して(このように円くなれという類感呪術)、はげしく叩きながら、

chux eatu 日を吐き出せ

chux eatu 日を吐き出せ

と唱えた。

6. 北海道の例(1)

十勝国高島村では、日食は海中にオキナと称する大魚のぼけものがいて太陽を呑むから起ると考え、舟ばたを叩いたり、近くに舟がない時は板きれを叩いたりしながら、

chup-kamuy お日さま

hōy ホーイ

e-ray nā あんたは死ぬよ

hōy ホーイ

と叫んだ。その際、男は弓矢を持ち出して、日を助けると云って日に向かって矢を射たり、鉄砲があるようになってからはそれを撃ち鳴らしたりした。

7. 北海道の例(2)

釧路国の屈斜路コタンでも、日食の際は板きれその他を叩きながら、

chup-kamuy お日さま

hōy ホーイ

e-ray nā あんたは死ぬよ

hōy ホーイ

yaynu-pā 息ふきかえせ

hōy ホーイ

と叫んだ。

2) 吉田巖

「愛郷草紙」 東北海道アイヌ古事風土記資料

帯広市社会教育叢書 第4巻、帯広市教育委員会、p50-51、1958年

日蝕とアイヌ

日月蝕について十勝オトフケのアイヌから親しく聞いた初の凡ては次の話でした。

明治40年の1月に「日蝕、月蝕は、日神、月神が死ぬるので大そう悲しいことだ。聚落で見つくと家毎に外に出て手に手に力の限り板の類を叩く。その音をききつけて他の神が助けてやるということだ」と。

又其翌々年2月十勝芽室村ケネのアイヌから聞かされた古伝に「恐い悪神が、日神を呑もうとする。半分も呑むと暗くなる。その時、鳥が沢山悪神の口に群りはいて日神を助けるともとのように明るくなる。これが日蝕というものである。

鳥はこういう働に免じて、何処へでも遠慮なく食物を漁り、人家のを盗んでも、人は見のがしにせねばならぬのだ」

一昨年8月、十勝フシコの老翁が「今以て昔と少しも変らぬのは、日、月蝕の時、老人達が揃って外に出て、板を叩き、口々に日又は月に呼びかける謠だ、こればかりは決して、どんな場合にも、この時以外には謠うことを聴かない」と語り、その謠に触れることを避けた。

(中略)

アイヌの研究者安田巖城氏に拠りますと「古来アイヌは日月蝕に対し全く日、月が死ぬものと考え、日、月蝕の際は、恐れおののき、翁達は、俄に屋外に飛び出し、白桶を伏せ、手に手に木片、篋などを振って滅多打ちし口に チップライ、ヤンヌーバ、ホイ と幾十百遍となく連誦し、蝕の終るまで、恐怖の句調で唱えつづける」と、言われた。

3) ジョン・バチェラー

①『蝦夷今昔物語』函館、p27、1884年

又日月ノ蝕スルヲ見ルヤ、之レ日月ノ死スルナリト、併シ此ノ死スル、何ノ故タルヲ知ラス、特ニ之レヲ畏縮スルノミ、如何トナレハ日月死シテ、復タ蘇ラサレハ、萬物皆死ニ歸スト

②『アイヌ人及其説話 上編』教文館、p60-61、1900年

千八百八十七年に於て日蝕ありしが著者はアイスに日蝕の形状を視せしめんと欲し少き板硝子を黒くし恰も日の蝕し始めたる時に至り此黒板硝子を以て日を見るべしと命ぜしが一人は其の日の蝕するを見るや否忽ち叫びてチュブライチュブライ Chup rai chup rai と云へり即ち日死ぬの義なり又他の一人も亦叫びてチュプチカイアヌ Chup chikaiau と云へり即日氣絶す或は忽ち死ぬの義なり此く云ひし外一語も發せず恐れ戦きて唯驚くべく恐るべしと嘆息のみ為し居るを見たり然れども彼等の最甚だしく恐怖するは日蝕皆既なること

論を待たず若し皆既の儘く光明再び舊に復せざれば日死して総ての生物も赤死すと思ふが故なり

③『ジョン、バチラー自叙傳 我が記憶をたどりて』文禄社、1938年

その年は(一八八七) 日食のある年ですから、私は前から暦を調べてその日と時間を見ておきました。アイヌ人たちに見せて上げようと思って、ガラスを煤で曇らし、その時間の少し前アイヌ人たちを呼び集めガラスを通して日食をはっきりと見せました。ところがアイヌ人たちはいよいよ日が暗くなってくるとその驚き方と申しましたら、そばにいる私の方が驚くくらいでした。皆鳴き声を立てて「ああ、どうしよう。神様が死ぬ。ああ神様が死ぬ。世の中は真っ暗になってしまった。私たちはどうすればよいのだろう」と大声で叫びます。水を口に含んで空に吐きかける者、ヒシヤクに水を入れてまき散らす者、中には金ダライを叩きタライを打ち、盆を叩いたり、また銅をならす者、鉢をならす者、そうして大声を上げて何か歌を歌いながら踊る騒ぎは…

④『アイヌの暮らしと伝承 よみがえる木霊』小松哲郎 訳、北海道出版企画センター、p213、1999年

死期の近づいた病人が出ると、冷たくて新鮮な水を口に含んでそれを瀕死の状態にある病人の顔や胸に吹きつけてやっていた。これもまた私が見たことであるが、水の入った桶を病人の側まで運んで来て、水に浸した両手や先端がよく分かれた小枝で病人の身体に水滴を撒き散らし、何とか瀕死の状態から脱するようにと手を尽くしていた。その後、長い祈りの言葉が述べられ、激しく嘆き悲しむ声が続くこれと同じようなことが、日蝕や月蝕の際にも同じようにアイヌの村々では行われていた。人びとは家の外に出て、触を受けた太陽や月に向かって水を吹きつけたり撒き散らしたりする。こうすることで、身体を舐まれて苦しんでいる太陽や月が生き返り、その光を再び取り戻させようとするのである。時によっては、蝕の起きている間じゅう太陽や月に向かって生き返れよ」と願いの言葉を述べることもあった。ヤナギ(柳)の枝やヨモギ(蓬)を束ねたもので水を撒いた方が、この病める天体を生き返らせるには特に効き目があるとされていた。

4) 菅江真澄

『松前と菅江真澄』内田 武志、p109、p113、1949年

「かたみ袋」(文政年間、1820年以降?)

日そく月そくのときは、ふなはたをたたき、こゑをあげて(肥、こゑのかぎり)あふく。こは、人のわつらはしきことを、月日のうへにのみかけ給ひて、かくわつらひ給へば、いさめ奉るといふ。

ある夜、あひの舟ごとに、チェツホヤマイカイノホイと、こゑをかきり舟のムタニを

たたきて叫は、日そく月そくのとき、日月のちからつけんとていふなることながら、こよひの月くらければ、月そくなりけるところ（へ）て、かくは、みなはたをならしけるといへり。

5) 北風磯吉

『北風磯吉資料集 アイヌネノ・アン・アイヌ(より人間的である人間)』(名寄叢書 第6巻) 佐藤幸夫、市立名寄図書館、p131-132、1985年

(26) 日食の祈り

器に清水を汲んできて、その水をイナウや笹で天に向って振り掛け心の中でチュプカムイの回復を祈るだけで、別に声を出して叫ぶようなことはなかった。

日食のとき叫ぶ呪文(?)の中には、次のような例(宗谷, 名寄)

cup kamuy 太陽のカムイ

eatu 吐き出せ

eatu 吐き出せ

hoy hoy ホーイ ホーイ

多少の差異はあっても日食の呪や祈詞は、大体上にあげた程度のものである。

[昭和11年6月19日の皆既食の時のことだと思われるが、尾沢カンシャトク氏は、『北海道文化財保護功労賞、受賞記念誌』に、次のように書いている。]

戦前のことになるが、アイヌは日食の時に悪神払いの儀式があることを知った。だがどのようなカムイノミをやり、どのようなことをやるのか知っている人がなかなか見つからなかった。だがちょうど昭和9年の日食の時に名寄アイヌ最後の大しゅう長である名寄在住の北風磯吉エカシがこの儀式をやるというので名寄にかけつけ、それに参加すると同時にいろいろ教わってきた。

(当時の様子を次のように語った。)

日食になり、北風さんが屋根に登り右手にエムシ(刀)を持って上下に上げ下げし(刀先を上に向ける)、フチは家の中でまな板を棒で叩いているのを見た。

「昭和46年11月談話」

6) 市町村史誌

『音更町史』音更町史編さん委員会、音更町、p1013、1980年

民謡と解説物語 「アイヌの歌」日蝕月蝕に祈る歌

チュプカムイホイ ひかりがみホイ
かくれたぞホイ チュプカムイホイ
でてくれホイ かくれずにホイ
でてくれホイ チュプカムイホイ
ひかりがみホイ
かくれずに でてくれ でてくれホイ

神々に捧げる歌の中で、原始の香りの強く感じられるのは、日蝕月蝕のときに祈る歌です。日月を光神(チュプカムイ)といったアイヌ。予期しない突然の変化に、深刻な恐怖におそわれたアイヌは、日蝕月蝕が僅かの時間に終わってしまった後も、恐怖からさめるまで歌いつづけたのです。
※近藤鏡二郎氏が音更アイヌコタンで採譜

4. 北海道教育委員会の調査報告書

①『昭和50年度(無形民俗文化財1)』p14、1976年

日食の呪文は、広く分布されていて、内容は、大同小異である。太陽は、アイヌにとって重要な神で、チュプカムイ chup-kamuy とよばれる。日食は、chup-kamuy が、魔神によって呑み込まれそうになるために起こるものと考えられていた。そこで十勝地方のように、男は、弓矢を持出して、空に向かって矢を射、太陽を呑みこもうとする魔神を威嚇したり、釧路地方では、お盆や板をはげしく叩きながら太陽に向かって元気づける動作を行う。

このときは、すでに述べたような、神を呼ぶ儀礼的な叫びを何度も行い、太陽に向かって呪文を唱える。ここに収録されているものは、次のとおりである。

チュプカムイ ホーイ 太陽よ、 ホーイ
chup-kamuy hoy
エライナ ホーイ あなたは死ぬよ ホーイ
e-ray na hoy
ヤイヌパ ホーイ 息をふきかえせ ホーイ
yaynu-pa hoy

②『昭和50年度(無形民俗文化財1)』p18、1976年

呪文

chup-kamuy ho
e-ray na ho (日蝕の際)
yaynu pa ho

※釧路市の四宅ヤエ氏 (1973年)

③『昭和 51 年度（無形無形民俗文化財 2）』 p55-56、1977 年

日蝕は、chup-kamuy が病気になったか、化物と戦っているところとかいう。それで、病気になったよとか化物の手を切ったよ、とか化物の足を切ったよ、とかいって呼んだり、鉄砲をうったりする。また、男は刀をふりかざし、女は板切れをたたきながら、つぎのような呪文をとる。

呪文

チュプカムイ ホー!

chup-kamuy ho! 太陽よ!

エライナ ホー!

e-ray na ho! あなたは死ぬよ!

ヤイヌ バホ!

yaynu-pa ho! 息をふきかえせ! ※鶴居村の八重九郎氏（1976 年）

④『昭和 56 年度（無形民俗文化財 6）』 p18、1982 年

日食のときの呪文

チュプカムイ ホー chup-kamuy ho 陽の神よ

エライナ ホー e-ray na ho お前は死ぬよ

ヤイヌパ ホー yay-nupa ho 元気を出せ!

※弟子屈町の日川キヨ氏

⑤『昭和 56 年度（アイヌ民俗調査 I 旭川地方）』 p94、1982 年

ツプ アン コイキ cup an koyki 日食。

「太陽がいじめられている」という意味。

まな板などを出して、打って大きな音を出し、太陽をいじめている悪神を追い払うと良いと考えられた。

※旭川市の石山長次郎氏

⑥『昭和 59 年度（アイヌ民俗調査 IV 静内・浦河・様似地方）』 p129、1985 年

日食は、お天道様が地上の病気を全部背負ってくれるから、お天道様が病気になったと考えられていた。「日食になる」ことをチュプ カムイ タスム cup kamuy tasum と言う。

※様似町の岡本ユミ氏

⑦『昭和 60 年度（アイヌ民俗調査 V 釧路・網走地方）』 p94、1986 年

日蝕 月蝕をチュプライ cup ray といい、悪い神（ウェンカムイ wen kamuy）が太陽や月を呑み込むものと考えた。主に女の人らが、呑み込まれないよう鍋を叩いて太陽や月に加勢する。（チュプ ヘスセカ cup hesseka）。夜通しチュプ カムイ エ ライ ナ、ヤイ

ヌパ cup kamuy e ray na, yaynupa 「月の神よ、お前は死んでしまうぞ、気をつけろ」と歌って加勢する。

※美幌町の菊地股吉氏

⑧『昭和 62 年度 (アイヌ民俗調査Ⅳ 静内・浦河・様似地方)』p63、1988 年

◆沙流編

10-3-1. 太陽と月について

お日さん、お月さんが隠れる (日蝕、月蝕) と、ほうき草(ムンヌイエプキナ munnuyepkina) で作ったほうきを持って、樽に入った水にほうきを浸し、チュプカムイ エライ ナ ヤイテムカ ウォーイ ウォーイ cup kamuy e ray na, yaytemka woy woy 「日の神、月の神、死ぬぞ、生き返れ」と叫んで天に向かって水をかける。心臓を冷やして生き返ってくれという訳で、皆で大騒ぎしてやったものだ。きれいな水をかけないといけないものだ。何か物を打ち鳴らすということはなかった。

⑨『平成 5 年度 (アイヌ民俗調査ⅩⅢ 千歳・門別地方)』p50、p124、1994 年

◆千歳編

プクル pukuru (袋) みたいなウエンカムイ wenkamuy (悪神) が来て、月を飲み込むと月食になると母が言っていた。カムイノミ kamuy nomi はしなかった。日食のことは知らない。

※千歳市の白沢ナベ氏

◆門別編

7-12-4. 天体の神

日蝕や月蝕の時、アルキ ワ イサム a=ruki wa isam 「飲まれてしまった」と言って騒いでいた。化物に飲まれたと思ったらしい。そんな時はクワ kuwa (杖) を持って、ウォーイウォーイと外で叫ぶ。

※門別町の佐伯ハマ氏

⑩『平成 6 年度 (アイヌ民俗調査ⅩⅣ 補足調査Ⅰ)』p58、1995 年

◆標茶編

7-12-4. 太陽の神

昭和 11 年の日食の時、前田専太郎が太陽に向かってホホホーと言いながら何か言っているのを見た。私達子供はガンビの皮をこがしてガラスに煤をつけて太陽を見ていたが。

※標茶町の島マチエ氏

⑪『平成10年度（アイヌ民俗調査XVIII 補足調査V）』p231-232、1999年

◆道東編

雷

雷が鳴るとき、日食や月食の時に暗くなるから雲に負けるなどノヤ noya（ヨモギ）を一握り手に持ってそれを振りながら家の入口で踊った。太陽や月（チュプカムイ cup kamuy）がんばれ、という意味だ。子どもの時にフチ húci（まごばあさん）にやらされて踊った。モン・フチ（祖母）は、月食や日食のときの踊りと歌を教えてくれた。月食のときも日食のときもフチは片手に鎌（悪いカムイを切るため）、片手にヨモギを持っていた。そのときの歌はNHKと更科源蔵先生が録音して持っている。

日蝕

7、8才のとき、フチに「お日さんがお月さんに負けるから、早く踊れ」と言われた。ヨモギ（ノヤ noya）や色々な草を片手に持って、家の入口で「お日さん負けるな」と踊り、神に頼む。

※旧阿寒町の小鳥サワ氏

◆門別編

太陽と月をチュプカムイ cup kamuy という。昭和11年の日食のとき美幌の野崎に住んでいて、ちょうど「麦の草取りをせ」と言われていた。母は弟を産んだ後で家の中で寝ていた。日食が始まると母は家から出てきて、とっさにヨモギで弓を作り、枯れたヨシを矢にして太陽の方に打つ真似をしながら

チュプカムイ ホー cup kamuy ho:

エライナ ホー érayna ho:

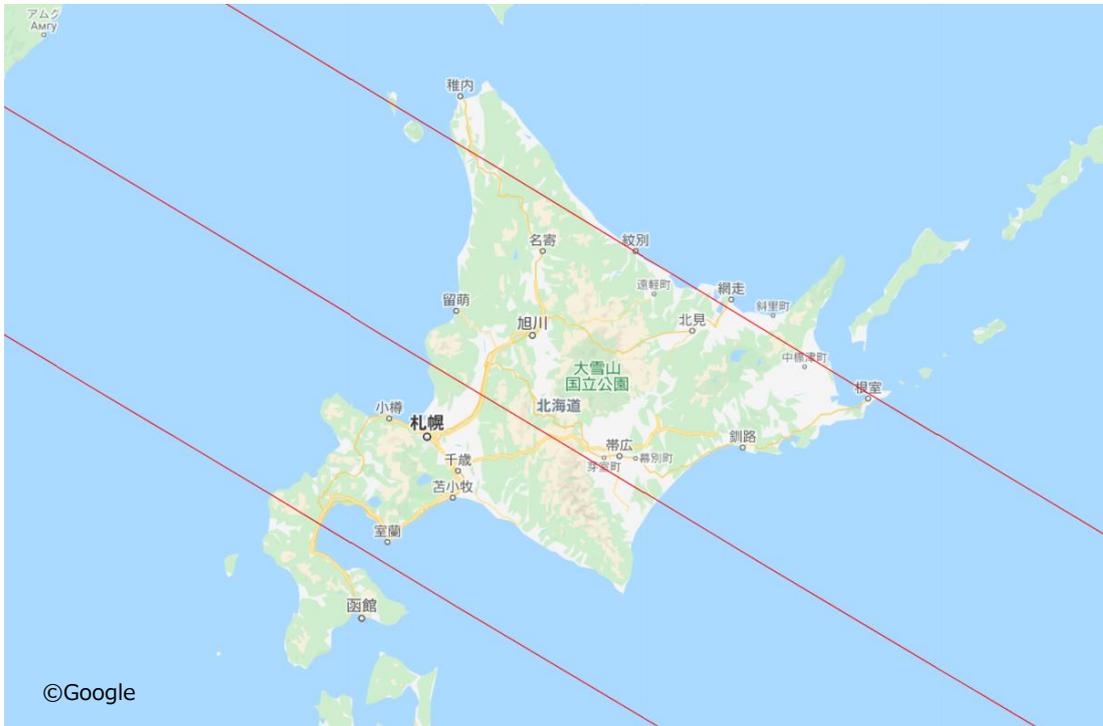
ヤイヌムバ ホー yaynumpa ho:

と歌いながら踊った。「おてんとさん、大変だけど身を守れ（ヤイヌムバ）」という意味の歌だ。矢を射るまねをするのは、太陽に悪い者がかぶさってきたので、その悪者を撃つということだ。

※美幌町の平林ミツエ氏

5. 2030年の北海道金環日食

2030年6月1日に、ほぼ全道で金環日食がみられる。見られるのは三本ある線の両端の赤い線の内側の範囲。中心の線に行くほど、欠けた時の太陽の形がきれいなリング状になる。



○伊達市で見た様子（天文ソフトによるシミュレーション）



伊達市の場合

15時41分 欠け始め

16時56分 金環食の始まり

16時57分 食の最大

16時59分 金環食の終わり

18時04分 欠け終わり ※時刻はおおよその目安。秒単位は不記載。

☆観測の際に**絶対に**やってはいけないこと

- ・肉眼、望遠鏡、双眼鏡、色付きの下敷き、フォルムの切れ端、サングラス、ゴーグル、すずを付けたガラスなどで太陽を見ないこと！

☆安全な観測のために

- ・専用の日蝕観測グラスを使う
- ・ピンホールで観測する
- ・太陽投影版に映して観測する
- ・科学館や天文台の観望会に参加する

以上